

未来へつづくたしかな一歩



成蹊学園マスコットキャラクター ピーチくん



ぼくは土の中で、やさしい春二先生の声をきいていた。
「大きくなあれ。きみはきみらしく、前を向いていけばいいよ…」
あたたかいその声に包まれて、ぼくは芽を出すその日を夢見ていた。



これは、ぼくがまだ、あおくてかたいモモだったときのおはなし。
ぼくが本館の地下から芽を出したのは、大正13年、今から97年も
前のこと。創立者の中村春二先生がお亡くなりになって、
成蹊学園は悲しみにくれていた。ぼくは長いこと春二先生
のご自宅のお庭に「種」として埋まっていたんだけど、
成蹊学園が池袋から吉祥寺に引っ越したときに、土と一緒に運ばれ
て、そしてそこから芽を出したんだ。



地下は暗かったけど、ときどき、元気な成蹊の子どもたちの声がひびいてきて、
ぼくはそれを聞いているだけで幸せな気持ちになった。春二先生の想いを伝える
モモとして、ぼくはやる気にみちていて、いつかたくさんの人が蹊（こみち）
を成すようなすばらしいモモになるぞ、と毎日ががんばっていた。

ある日、いつものように地下からこっそりみんなを覗いていたら、ぽつんとひとり
本館の前に座っている子がいた。「どうしたの？」「え！モ、モモ～?!…」
…そうしてぼくたちはすぐにうちとけたのだった（たぶん）。

その子の名前はゼンちゃん。身体が弱くてみんなと遊
べないという。ぼくはすぐさま友だちに立候補して、
毎日をゼンちゃんと過ごした。春も夏も秋も冬も。
ぼくたちはいつも一緒にいて、好きなことや将来の夢
を語り合った。

「ぼくはみんなが蹊（こみち）を成すようなモモに
なりたいんだ。ゼンちゃんは？」

「ぼくはお医者さんになりたい。でもむりだと思う。」

「そんなことはないよ。ゼンちゃんならできるよ。」じゃあ、約束しよう。

目標に向かって進むこと、10年後、夢を叶えたかどうか、ここでまた話そう。
それからすぐにゼンちゃんは外国に引っ越すことになった。





10年後の約束の日、ぼくは緊張していた。ゼンちゃんは来るのか、ぼくとの約束を覚えているのか、そして…「ピーチくん！」ゼンちゃんは来た！10年間のブランクなんてぜんぜん感じなくて、ぼくたちはハグをして、そして、時間を忘れて話をした。ゼンちゃんが前よりずっと元気になったこと。外国の学校でがんばっていたこと。目標に向かって進んでいること。ぼくは嬉しかったけど、ゼンちゃんがキラキラしていてまぶしくてちょっとうつむいてしまった…

だって、ぼくは毎日がんばっていたのに、10年前と同じ、あおくてかたいモモだったんだもの。

その日の夜、とても不思議な夢を見た。ぼくは旅をしていた。でも空が急に真っ暗になって、何も見えず迷子になってしまった。気がつけば足も痛い。怖くて泣いていたら、暗やみのずっと先から春二先生の声が聞こえてきた。「ピーチくん、どうしたんだい？」



ぼくは、ひっしに春二先生にうったえた。「転んで足をすりむいたから、もう歩けない。くらくて道もわからない。ぼくはまだあおくてかたいモモだから、ひとりでは行けない。春二先生、どこにいるの？助けて。」

なみだでいっぱいぼくに春二先生はやさしく言った。「だいじょうぶ、だいじょうぶだよ。目をあけてごらん。そして旅を楽しんだらいい。」



ぼくは怖くてとじていた目をそっとあけてみた。暗やみの先に、小さな光がさして、朝日が昇るのが見えた。そうしたらそこには前とはちょっと違う道が続いていた。

「ピーチくん、今はまだあおくてもいいじゃない。ゆっくりでいいんだ。人生という旅で大切なことはね、毎日の変化じゃなくて、前に進む一步一步の“たしかさ”なんだよ…」

ああ、そうだ。そうだった…
ぼくがまだ「種」だったときに、春二先生がいつも語りかけてくれた言葉。あたたかいものに包まれた気がして、ぼくははっと目を覚ました。

そしてぼくは決めた。歩き続けることを。
ゆっくりでも前に進もう。転んだりこわくて立ち止まったり後戻りしたりする
ことがあっても。自信をもって。勇気をもって。未来に向かって。
だから、次にゼンちゃんに会うときにはきっと顔をあげられるだろう。
そう思ったら、なんだか少しピンクでジューシーな桃に近づけた気がした。



これは、ぼくがまだあおくてかたいモモだったときのおはなし。
それからずいぶん長いこと、ぼくは歩き続けている。
転びながらも、たしかに一歩をつなぎつづけている。
なぜなら、それが未来をちょっとステキにするってことを知っているから。

そう、だいじょうぶ。
ぼくたちはいつでも一歩をふみだせる。

でもときどきは、立ち止まって、前に進めなくなることもあるかもしれない。
真っ暗やみのなか、ひとりぼちな気持ちになることもあるかもしれない。
そんなときはぼくがずっとキミのそばにいるよ。朝日が昇ると感じる時まで。

忘れないで。かならず光はさすことを。



キミがぼくのちからになる。
キミの笑顔がぼくの養分。

大好きだよ。

筆者のプロフィール

ピーチくん (ぴーちくん)

1924年3月3日生まれの桃

成蹊学園マスコットキャラクター、モデル、俳優

コロナ禍でみんなに会えないじかんをかって、

Webサイトを作ったよ→ <https://www.seikei.ac.jp/gakuen/peachkun/>

去年のコラム→https://www.seikei.ac.jp/gakuen/esd/columnSP_peach.pdf



ぼくをモチーフにした物語「春二先生と夢の教室」もあるよ。
よかったらみてね。

<https://www.youtube.com/watch?v=1Bh6tojcUeg>

(ついしん) おてがみはこちらへ↓

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1

成蹊学園 ピーチくん あて



たしかなあしぶみ
なかむらはるじ

君たちは世の中に出た、
学校の窓から見た世の中とは随分違っておるだろう。
がっかりしたこともあろうし、
又こいつは面白いと思ったこともあるう。
けれども毎日同じ仕事をくりかえすことは、
いやに、誰も思っていよう。
そしてこんな一生を送ってはいえと思う折があろう。
しかし、毎日目先きの変わることが
生きるための必要な条件だろうか。
又、目先が変わらなければ
人の目的がとげられないだろうか。
太陽は東より出て、西にはいる。
冬が去れば春が来る。昼の次は夜だ。
毎日同じ仕事をするをつまらぬと
思うものは、あわれむべき人だ。
同じ仕事のうちに種々ふかい意味が潜んでいる。
人の旅路をふりかえて見ると、
その路の面白さや変化が嬉しいのじゃない。
その旅路を踏みしめる自身の
一足一足の確かさが大事なのである。
君たちは日々の旅路をしっかりと踏みしめて進みたまえ。
その気持を失わなければ、いつとなく知らぬまに
緑の山、清い泉の楽しい村里に踏みいれるだろう。

「たしかなあしぶみ」は、中村春二先生が卒業生に送った言葉です。

原文は「かながき」で書かれています。

